桜鱒の棲む川

水口憲哉

フライの雑誌社

桜鱒の棲む川　CONTENTS

Ⅰ　**美しき頑固もの、サクラマス**　005
プロローグ―桜鱒の棲む川をめぐる旅の始めに
いつから「サクラマス」と呼ばれるようになったのか／サクラマスの一族には四つの亜種がある／北海道での呼称「ヤマベ」は本州から伝わった／スローでマイペース、したたかな頑固もの、サクラマス／この一〇〇年でサクラマスの生息環境は激変した／川が川でなくなった時サクラマスは途絶える

Ⅱ　**サクラマス・ロマネスク**　015
六億六千万円かけて遡上ゼロの「県の魚」　016
コラム①　サクラマスの起源を考える　022
サクラマスのロマンと資源管理　024
コラム②　ヤマメとサクラマスとを分ける鍵、スモルト化　030
二二〇年前のサクラマス漁獲量を読み解く　032
コラム③　サクラマスの海洋生活と母なる川　038

Ⅲ　**サクラマスよ、故郷の川をのぼれ**　041
山形県・小国川　ダムのない川の「穴あきダム」計画を巡って　042
コラム④　カワシンジュガイは氷河時代からのお友達　048
山形県・赤川　サクラマスのふ化放流事業は失敗だったのか　050
コラム⑤　信州の高原にサクラマスが遡った日　056
秋田県・米代川　サクラマスの遊漁対象化と増殖事業との複雑な関係　058
富山県・神通川　サクラマス遊漁規制の経緯とその影響　064
コラム⑥　「戻りヤマメ」とは何だろう　072
福井県・九頭竜川　九頭竜川は〈世界に誇れるサクラマスの川〉になるか　074
コラム⑦　自由なサクラマス釣りの魅力とその未来　080
石川県・犀川　南端のサクラマスと辰巳穴あきダム訴訟　082
コラム⑧　湖に閉じ込められたサクラマスたち　088
新潟県・三面川ほか　新潟サクラマス釣り場の現状と問題点　090
コラム⑨　中禅寺湖のホンマス、木崎湖の木崎マスの正体は　096
岩手県・安家川　サクラマスよ、ウライを越えよ　098
青森県・老部川　原発、温廃水、サクラマスの〈ブラックボックス〉　108
コラム⑩　海と川のサクラマス、どちらがおいしいか　114
岩手県・気仙川　サクラマスが群れる川のダム計画　116
コラム⑪　はじめに人工ふ化ありき　126
したたかに生き延びよ、サクラマス　128
コラム⑫　マリンランチング計画という悪い冗談　134
北海道・斜里川ほか　北の大地のサクラマス、特別な事情　136
コラム⑬　内村鑑三とサケ・マス増殖事業　144
岐阜県・長良川　長良川河口堰とサツキマスの自然産卵　146

Ⅳ　**ダムをやめれば、サクラ咲く**　157
レッドデータブックを疑え　158
コラム⑭　キツネのチャランケ　164
ダムをやめれば、サクラ咲く　166
コラム⑮　サクラマスは故郷の川でしか生きられない　176
エピローグ―桜鱒の棲む川のほとりで　178

あとがき　188

I

美しき頑固もの、サクラマス

富山県庄川のサクラマス（撮影：田子泰彦）

サケとマスについてもっと語り合いたかった
加藤史彦さんと萱野茂さんに

プロローグ

桜鱒の棲む川をめぐる旅の始めに

いつから「サクラマス」と呼ばれるようになったのか

学名がどうの種名がどうのという以前に、サクラマスという標準和名がいつ頃、誰によって使われだしたかをまず見てみよう。

一〇〇〇年以上昔の延喜式（えんぎしき）（平安時代中期に編纂された律令細則）に、〝腹赤魚〟とあるのがサクラマスと考えられる。筑後と肥後から献ぜられたとあるので、今ヤマメのいる川に当時はサクラマスが遡上していたのかもしれない。その後、ずっと「鱒」と呼ばれていた。サクラマスの名の由来を、真山紘（まやまひろし）さん（元さけ・ます資源管理センター調査研究課長）に教えていただいた。以下に整理する。

サクラマスという名称が学術論文に登場するのは、大島正満の〝ヤマメ・アマゴの系統と生活史に関する一、三の知見〟（一九二九／自然科学第四巻一号）で、和名として「マス」と「サクラマス」が連記されている。そこでは〝産卵期には美しい虹色をおびるようになる。サクラマスという名は桜が咲くころに漁獲されるから名付けられたといわれているが、産卵期の体色がその名の由来であると考えられる。〟としている。

サクラマスの生活史を明らかにした水産研究者大野磯吉も一九三一年以降は一貫している。同じ北海道の水産技師半田芳男はその著書『鮭鱒人工蕃殖論』（一九三二）で、〝海にて成育するものは二、三年目の早春遡河する口黒鱒及桜鱒と三、四年目に遡河する普通の鱒とあり、口黒鱒と称せらるるは口の内部黒色を呈するものにして、桜鱒と称せらるるは口黒鱒の来遊せる後恰も桜花の咲く頃に遡河す。何れも普通の鱒に比して小型なり。大形なる鱒は六月より九月に亘り遡河す。〟として、一九三八年になっても「マス」という名称を用いて「サクラマス」は方言との扱いをしている。遡上群に三つあるというのが興味深い。

サケ・マスの人工ふ化放流事業では、それまで「鱒」として一緒にされていたカラフトマスとサクラマスが区別されたのが一九三六年以降であるから、北海道では技術者でさえそれほど関心が高くなかったのかもしれない。

サクラマスの一族には四つの亜種がある

サクラマスの仲間にはビワマス、サラマオマス、ヤマメ、アマゴ、サツキマスがいるが、これらはどのように区別され、人々の見方が確定していったのか。

これも大島正満（一九二九、一九五九）がほとんど整理している。ビワマスはサクラマスと同じく一九二九年の論文で、新称としてビワマスと命名している。同論文では、本州のヤマメと北海道のヤマベは全くの同一種であると結論づけている。そしてヤマメについては、〝概括的にいえばサクラマスの淡水性のもので、成熟はするが、終生幼魚の形態を保つものである。〟と定義している。このときには、アマゴは琵琶湖の沿岸でアマゴと呼ばれているビワマスの幼魚と同じであると考えている。

そして一九五七年の『桜鱒と琵琶鱒』では、三〇有余年のサクラマス一族研究の結果として次のようにまとめている。(1)一九一九年にジョルダンと共に *Oncorhynchus masou formosanus* と学名を与えて報告

したサラマオマスはヤマメと同様である。(2)木曽川で採集されたカワマスと呼ばれている鱒は琵琶鱒の降海型である。(3)アマゴは琵琶鱒の河川陸封型である。(4)桜鱒並びに琵琶鱒は遺伝的形質を異にする別種であり、その両者から分派するヤマメとアマゴは明確な別種である。

それ以降の研究ではコラム①に示すように、サクラマス（ヤマメ）、サツキマス（アマゴ）、ビワマス、サラマオマスの四亜種が存在するとされるようになった。なおこれらサクラマス一族の分布域では、それぞれシーマ（ロシア）、山川魚（朝鮮）、大甲鱒／桜花鉤吻鮭（台湾）、イチャニウ（ホリを掘るものの意）／サキペ（夏の魚）／キッレッポ（降海型）（以上はアイヌ）などと呼ばれている。

北海道での呼称「ヤマベ」は本州から伝わった

サクラマスの一生の各段階での呼び名を、久保達郎（一九七四）『サクラマス幼魚の相分化と変態の様相』は、(1)アルヴァン・前期稚魚　(2)フライ・後期稚魚　(3)パー・幼魚　これが河川残留パーとならずに銀毛となり一〇センチほどで海に下ったものを、(4)スモルト・ギンケヤマベとしている。成熟したオスのパーであるダークパーを、北海道の釣り人はサビヤマベ、クロコ、翌春のやや成長したものをオッネンヤマベ（越年ヤマベ）と呼ぶとしている。パー（幼魚）、銀毛パー、中型パーをひっくるめて新子（シンコ）と呼んでいるともしている。

北海道ではサクラマスの幼魚や本州でいうヤマメをひっくるめて、ヤマベと呼ぶ。アイヌの人々はこれらの魚をキッラ（すばしこく逃げる）、ポンキッラ（小さいヤマベ）、キッラメ、ヤイチエップ（ふつうの魚）などと色々に呼ぶが、ヤマベという呼び名はアイヌ語とは全く関係がないらしい。

鈴野藤夫（二〇〇一）『魚名文化圏［ヤマメ・アマゴ編］』によると、西日本での河川残留型のサクラマスの呼称である〝ヤマメ〟が、ヤマベの語源ではないかと考えられている。

驚いたのは、現在北海道中心に広く分布しているヤマベという呼称は、関東地方から青森県にかけて使われていたものが江戸時代に津軽海峡をわたり、北海道南部の松前を中心とした地域で使われるようになったという記述である。鈴野は、「明治二年（一八六九）に蝦夷地が北海道と改称され、開発の波が海岸から、次第に未開の内陸部を蚕食するのと歩調を合わせて、ヤマベも侵出したといえるだろう。」としている。

スローでマイペース、したたかな頑固もの、サクラマス

シロザケは日本列島に産卵河川をもち、それがカラフトマスでは道東を主とした北海道と狭いが、共に漁獲量が多い。私たちになじみのあるその二種と、サクラマスの生活史とを比較してみる。次ページの表でそれを整理した。シロザケとカラフトマスは、オホーツク海で夏を過ごし秋の寒冷化と共に太平洋へ出てゆき、遠くアリューシャン列島やアラスカ湾の南にまで回遊し越冬する。対してサクラマスは海での回遊域が近小で、日本海などへ南下して冬を過ごす。この生態は日本海の成立過程ともからみ、サクラマスに固有の進化の道筋を示していると言えるかもしれない。

シロザケ、カラフトマス、サクラマス三種の母川回帰性の違いは、そこに生活史と環境の人為的変化との関係がからむと、人工ふ化放流での「回帰率」や「回収率」の違いとなって現れてくる。魚たちの回帰性と生活史は以前から変わらないし、変えられない。しかし環境と漁獲は人為的に変わるし、変えられる。

表：シロザケ、カラフトマス、サクラマスの生態と生活史の比較

	日本列島における産卵河川の分布	生活史の多様性	河川残留型	湖沼陸封型	海洋生活の期間	海での回遊域	太平洋での漁獲量	母川回帰性	河川への遡上時期	産卵場所
シロザケ	広い	小さい	無	無	1-5年	遠大	多い	やや緩やか	10-12月	中流域
カラフトマス	狭い	小さい	無	無	1年	中位	多い	かなり弱い	7-10月	下流域
サクラマス	**広い**	**大きい**	**有**	**有**	**1年**	**近小**	**とても少ない**	**確実で強い**	**4-6月**	**上流域と支流**
本書の参考コラムNo,	③	①②⑥	①②⑥	①⑧⑨	③⑥	③		⑮	⑩	

こういった関係がサクラマスではどうなっているのかを、本書では考えてゆきたい。

サクラマスがどんな魚であるかは、シロザケ（サケ）と比べてみるとよく分かる。サケが大量に獲れて生活史が単純で分かりやすいのに対して、サクラマスは少量で多様性が大きく分かりにくい。そんなサクラマスを形容するための言葉として、次のような言葉を考えた。**スローでマイペース、複雑系で見えにくい、したたかな頑固もの。**これらの中身は本書を読み進むにつれてだんだん見えてくると思う。

この一〇〇年でサクラマスの生息環境は激変した

サクラマスの生活史や生態というか性格は何万年と変わっていない。しかしこの一〇〇年は人々の関り方が次々といろいろな形で強まりサクラマスとぶつかっている。

海での漁獲の拡大と強化、川での親魚の漁獲と釣獲、河川のダムなどの工作物の建設、河川の汚染と環境改変、人工ふ化放流事業等々。本書ではこれらの項目一つ一つについて深く追求しようとするものではなく、サクラマスにとってそれがどのようなものとして影響しているかを見てみる。

筆者とサクラマスとの関わりは、岩手県安家川（あっかがわ）の河口のウライ（魚止め）をどうにかできないか、から始まった。そしてそれは桜鱒の棲む川はどうなっているのかを調べる旅となっていった。これまで何のためらいもなく建設されつづけてきたダムを、どうにかならないのかという人々の思い、もっとサクラマスが釣れたらよいという釣り人の願い。その流れの中で、サクラマスの増殖をもう一度考え直してみようという国や県の研究者の働きに、つき動かされての調べものとなった。結果として、それまで関心の薄かった北海道におけるサクラマスがだんだんと見えてくるようにもなった。

川が川でなくなった時サクラマスは途絶える

太平洋のサケ属のルーツにあたるサクラマスの仲間が、いまレッドデータブックで取り上げられ、生存するギリギリの状態にある。本書ではその様子を日本各地の川、一本一本で見てゆく。川が川でなくなったらサクラマスは途絶えてしまう。人の手ではつくることのできない、まさに自然そのものである。各地でそのように考え、活動している人々は多い。

だが、サクラマスという魚がどんなものであって、私たちがどのように対応すればいつまでもつき合い続けられるのかを、もう一つ分かっていない人も多いようである。筆者自身も安家川のサクラマスを調べるまではそうだった。いまこの『桜鱒の棲む川』をまとめるにあたって、どのようにすればいいのかの方向性が見えてきたように思う。

北東アジアの大地と川と海の数百万年という時の流れの中で、今なお分化し、進化しつつあるサクラマス。しかし、その行く末は定かではない。その未来を確かなものにするのは、桜鱒の棲む川の沿川で、サクラマスを見守りつづける人々である。

山形県赤川のサクラマス（撮影：松田洋一）

Ⅱ サクラマス・ロマネスク

山形県最上川のサクラマス釣り（撮影：松田洋一）